

成田達輝

V. グロボカール：？肉体の

1985年作の衝撃的な作品です。文字通り「肉体」を用いて、楽器としての可能性が極限まで試されます。作曲したのは、スロベニア人の両親を持つフランスの作曲家ヴィンコ・グロボカール。彼はトロンボーン奏者でもあり、その作品を貫く根幹には即興があります。

吉田 文：ヴァイオリン・ソロのためのドレープ（世界初演）

吉田文さんは、デンマークとオランダを拠点に活動する神戸出身の新進作曲家。作品を委嘱したキッカケは、吉田さんの室内オペラの世界観が好きだったからです。本作は、私の好きなデザイナー、リック・オウエンスの美しい服のドレープをもとに作曲されています。

A. ジョリヴェ：呪文《イメージが象徴となるために》

フルートの名品を数多く残したフランスの作曲家アンドレ・ジョリヴェが1937年に作曲した独奏曲。音楽愛好家でもあり、ヴァイオリンも弾いた写真家リプニツキのために書かれました。他の楽器でも演奏可能ですが、ヴァイオリン独奏の場合、G線のみが用いられます。呪文のように絡みつき、舞台上に立ちのぼるフレーズが象徴的な余韻を残します。

平 義久：収束Ⅲ

A. ジョリヴェにも作曲を学んだ平義久さんは、生涯の大半をパリで過ごしました。「収束 (Convergence)」シリーズは、マリンバ奏者、安倍圭子さんのために書かれた独奏曲として1975年にスタートしました。3番目となる本曲はフランスのヴァイオリニスト、ドヴィ・エルリーの委嘱により1976年に書かれました。日本的な響きや「間」が感じられる超絶技巧な作品です。

G. ブレクト：ヴァイオリン・ソロ

初期フルクサスでも活動したニューヨークの芸術家ジョージ・ブレクト（彼の名前はドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトに由来する）が1962年に発表したユニークなパフォーマンスアート。楽器ケースを手に登場した奏者（演者？）が、ヴァイオリンを弾くのかと思いきや……。ヴィオラ、チェロ、コントラバスでも演奏可能とされる（さもありません!）。

J. ケージ : 4分33秒

言わずと知れた現代音楽のマイルストーン。この曲には音そのものは書かれていませんが、3楽章形式(2楽章がいちばん長い)という指定があります。この曲から感じるメッセージは「私はあらゆる立場に立ち、同時にどんな立場も取りません」というもので、「音楽体験とは何か」という根本的な問題を我々に突きつけます。皆さんはこの曲に、何を感じとりますか？

一柳 慧 : フレンズ

ジョン・ケージを日本に初めて紹介して、「ケージショック」とも言わしめた一柳慧さんのヴァイオリン独奏曲です。たった3分にヴァイオリンの「哲学的な」モチーフが凝縮され、非常に簡潔ながら、豊かな音風景を思い起こさせます。一柳慧さんの作品には、いつも音世界の持つ原理や真理の提示のようなものが感じられ、演奏するたびに新鮮な感動を覚えます。

梅本佑利 : プラスチック・ヴァギナ〜ヴァイオリンのための (世界初演)

2002年生まれの作曲家、梅本佑利さんの新作。梅本さんとは2019年秋に初めて会ったからの3年間で10曲以上の委嘱と初演をさせてもらい、その中にはモーツァルトの協奏曲のカデンツァ「タギング」、ヤマハ自動演奏ピアノとのコラボ作品「スーパーヤマハボーイ」、電話の保留音のための作品「050-5857-9289」など、音楽と現代美術の分水嶺的な作品があります。

山根明季子 : うねうねとうごくオブジェα

山根明季子さんの2009年の作品で、うねうねとうごく音の形作る具象が宙を漂うような曲です。山根さんは梅本さんとの共同作品「管弦楽のための0o./x」も発表しており、方向性の近さを感じます。過去に山根さんのオーケストラ作品「アーケード」を聴き、その斬新さに感動して、今回、作品を演奏させていただくことになりました。

増井哲太郎 : 無伴奏ヴァイオリンのための可変双魚室 (世界初演)

1989年生まれの作曲家・増井哲太郎さんの新作。彼の音楽の特徴は、直截的なアイデアの展開と、1曲聴いただけで世界中を旅する気分になる想像力の豊かさにあります。本曲では、カズーという楽器を啜えながら弾いたり、叫んだり、弓をV字に振ったり、本日のプログラムの1曲目にも共通する「表現への渴望」が感じられます。長引くコロナ禍において、人は夢見ること忘れてしまったのではないかと感じ、彼に新作を書いてもらい、今回のプログラムの終曲におきました。